

# 電影会歌<sup>1)</sup>、<sup>2)</sup>、<sup>8)</sup>

清水勤二 竹田喜一 作詞 早川弥左衛門 作曲

<p>1番 文化の華を飾るべく 花に聳ゆるわが校舎 仰げ進取の旗印 四年の誓い いや固く 契りて立てる若人の 声に不撓の響きあり</p>	<p>ぶんかのはなを かざるべく はなにそびゆる わがこうしゃ あおげ しんしゆのはたじるし よとせのちかい いやかたく ちぎりてたてる わこうどの こえにふとうの ひびきあり</p>	<p>(入学) (意識) 「日本の産業中心地を興し育てることを目的として」<sup>3)</sup> 設立されたわれらの大学は、 第一句 学術の成果をあげ、文化の華を飾るという 使命感に満ち、 第二句 咲き誇る桜花の中に、聳え立っている。 第三句 進んで物事に挑戦して時代を先取りして来た 先輩たちに敬意を払い、 第四句 新入生であるわれらも卒業まで学問に邁進する ことを誓い、その誓いをますます固くする。 第五句 固く誓い合って立っている、われら若人、 第六句 その発する声には、どんな困難にあっても 決して負けないという決意が漲っている。</p>
<p>2番 春繚乱の花のかげ 秋清澄の星の下 熱き血潮の高鳴りて 聖き希望となるところ 不退の歩歩も撓みなく 進みて止まむ健男子</p>	<p>はる りょうらんのはなのかげ あき せいちょうのほしのもと あつきちしおの たかなりて きよききぼうと なるところ ふたいのほほも たゆみなく<sup>4)</sup> すすみてやまむ けんだんじ</p>	<p>(学問) 第一句 春は咲き乱れる桜の木陰で学び、 第二句 秋は清く澄んだ星明かりの下で学ぶ。 (春夏秋冬移り変わる季節の中で、学問を深めるほどに) 第三句 「情熱を傾けて学び立派な理想を持ちたい」 という熱い思いはますます高まって行き、 第四句 この大学で、純粋で高潔な希望となっていく。 第五句 後戻りすることなく、一步一步進むその歩みは、 いかなる時も留まることはない。 第六句 さあ、立ち止まることなく、前進し続けよう、 心身共に健やかな若人よ。</p>
<p>3番 若き血潮の溢るれば 静かに立ちて寄る窓に 伊吹の夢もほのかにて 紅もゆる雲の色 意気こそ挙ぐれ大丈夫の たぎる胸にもいたらずや</p>	<p>わかきちしおの あふるれば しずかにたちて よるまどに いぶきのゆめも ほのかにて くれないもゆる くものいろ いきこそあぐれ ますらおの たぎるむねにも いたらずや</p>	<p>(恋) 第一句 若い身体には、熱い血潮が溢れている。 (それは学問ばかりではない。) 第二句 (燃える思いを秘め、) 静かに窓辺に佇むと、 第三句 (窓ガラスにかかる白い) 息吹の向こうに 夢 (のようにあなたの姿) がほのかに浮かぶ。 第四句 (遥かなあの伊吹山<sup>5)</sup> にかかる) 紅に燃える 雲の色。 第五句 (その鮮やかな色を目にし、) 若人の意気は ますます高まる。 第六句 (しかし学問への情熱は、) 秘めた思いに 高ぶる胸にも及ばないのだろうか。 (いや、学問への情熱は、恋慕の情より強い。 さあ、今は学問の道を邁進しよう)<sup>6)</sup></p>

<p>4番          噫々大空に照る月の影永久に変わりなく          木曾の流れに映じては悠々として行く水を          汲みてや尽きむ交わりのその名ゆかしき電影児</p>	<p>ああ おおぞらにてるつきのかげ とこしえにかわりなく          きそのながれに えいじては ゆうゆうとして ゆくみずを<sup>7)</sup>          くみてやつきむ まじわりのそのなゆかしき でんえいじ</p>	<p>(卒業、そして電影会)          第一／二句 大空を照らす月の光は永久に          変わることがない。          第三／四句 その月影を映す木曾川の清い流れも、          悠々と、変わることなく流れていく。          第五句 さあ、木曾川の流れのように          尽きることなく酒を酌み交わそう。          汲めども尽きぬ木曾川の流れのように、          われらの友情も終わることなく続いていく。          第六句 そんなすばらしい人々が集まるのは一体          どんな会なのだろうと、誰もが知りたがる。          これこそ電影会であり、そこに集うわれらは          電影児である。</p>
---	---	--

## 註釈

### 1) 電影会の名称の由来

昭和4年、電気科学生の親睦団体として結成。初代科長清水勤二先生（後の名工大初代学長）を会長に推薦。会長により、電影会と命名。これは、鎌倉時代の傑僧、無学祖元禪師の「電光影裏斬春風」から採られた由。雑誌「電影」発行。電影会歌きまる。

無学祖元禪師： 鎌倉円覚寺（えんがくじ）の開山（かいさん）、佛光國師（ぶっこうこくし）は、名は祖元（そげん）。字（あざな）は子元。無学（むがく）と号す。宋（いわゆる南宋）の末期、モンゴル民族の「元（げん）」が中国征服を着実に進めつつある時代に生まれ、十有余歳にして径山（きんざん）の無準（むじゅん）和尚に弟子入りし、研鑽すること数年、ついに禅定（ぜんじょう）ようやく熟して、師の法を嗣ぐに至った。

後に今の浙江省にある台州（だいしゅう）真如寺（しんにょじ）に住したが、南下した元兵が国土を蹂躪し、至るところで乱暴狼藉を働く噂を聞いて、今の福建省にある温州（うんしゅう）能仁寺（のうじんじ）に避難します。しかし、元軍は揚子江を渡って温州に侵攻し、能仁寺にも乱入して来ます。一山の僧たちは逃げ惑うも、無学祖元禪師、ただ一人踏み止まります。

禅堂の禅榻（ぜんとう。座禅に用いる腰掛け）に、どっかと坐り禅定三昧に入って、泰然自若、動ずる気配もありません。群がり困んだ元兵の一人が大刀を揮（ふる）って、禅師の首に当て、「老和尚、起！（老いぼれ坊主、立て！）」と怒鳴ります。そこで初めて禅定を出た禅師は、やおら、一円相（いちえんそう）を描いて静かに偈（げ。経典の中で詩句の形式をとり、仏徳や教理を述べたもの）を唱えます。（これは、臨刃偈、あるいは臨劍頌とも呼ばれる）

乾坤無地卓孤筇 乾坤（けんこん）孤筇（ここう）を卓（た）つるに地なし  
 喜得人空法亦空 喜び得たり、人（にん）、空にして、法もまた空なるを  
 珍重大元三尺劍 珍重せる、大元三尺の劍  
 電光影裏斬春風 電光、影裏（えいり）に春風を斬る

天地には、ただ一本の杖を立てる余地もないほどにあなた方「元（げん）」の天下である。どこかに行けと言われても、どこへも行けはしない。

しかし、私は、幸いに、人は実体がなく、仏法もまた実体がない、一切皆空（いっさいかいこう）の理を体得することができたので、執着するものとして何一つない。喜ぶべきことだ。

あなたが持つ元（げん）王朝の長劍をせいぜい大切にすることがいい。私を斬るというけれど、言ってみればその

大刀も空、私も空。

空で空を斬る、あたかも稲妻がピカリと閃(ひらめ)く間に\*) 春風を斬るようなものではないか。さぞかし、手応えの無いことだろうよ！死ぬもよし、生きるもよし。どうぞご自由にこの老いぼれ坊主の首を斬りなさい！

さすがの乱暴者も禪師の挙動に圧せられて、振り上げた大刀を収めてそそくさと退散したことでしょ。

「筳(こう)」とは中国四川省に存する竹の一種で、節は普通の竹よりも長く、内部は空洞ではなくて樹木のように充実しており、杖(つえ)に利用されることから、よく僧の持つ錫杖(しゃくじょう)の意に用いられます。

一切皆空の理。すなわち、目にうつるあらゆる現象や存在には、実体はなく、諸々の相互作用の中こそ存在するのであって、それを縁といいます。仮に寄り集まっているのに過ぎません。縁が尽きればまた分散してゆく。この現象を理論として了解するのではなく、実地に体験した一人の禅僧のぎりぎりの生死観(しょうじかん)が、この「電光影裏に春風を斬る」の語です。(浅学菲才に付き、佛教の事項に関しては各自で別途ご確認ください。)

因みにこの無学祖元禅師、母国宋の滅亡に遭うや直ちに日本に渡来し、時の執権、北条時宗を心血そそいで薫陶し、時宗をして文久の役・弘安の役の二度にわたり元軍を撃滅せしめたことを思うと、何か不思議な縁を感じます。

参考：電影会名簿(昭和48年版)

侍者徳温寺編：“無学禅師行状、佛光禅師行状”佛光圓滿常照國師語録十卷、

大日本佛教全書、佛書刊行会編纂(明治45年)、名古屋市鶴舞中央図書館蔵書

細川景一：“白馬芦花に入る 一禅語に学ぶ生き方” 柏樹社(1987)

夏目漱石：“吾輩は猫である” 漱石全集 第1巻、pp.337,370、岩波書店(1976)

\*) E22は同期会を「閃影会」と名付けている。

## 2) 電影会歌

作詞者、清水勤二先生は、名古屋工業大学初代学長。昭和24年5月31日就任。

また、(共同)作詞者として、電影会名簿(昭和58年版、表紙見返し)に見える竹田喜一とは、竹田喜一先輩(E7)のことと推察する。

作曲者、早川弥左衛門先生について：

1911(明治44)年3月名古屋の「いとう呉服店(現大丸松坂屋)」が「いとう呉服店少年音楽隊」を結成。

1927(昭和2)年2月 楽長に就任した前海軍軍楽隊長の早川弥左衛門が弦楽器を積極的に取り入れ、「洋楽研究会」を組織しシンフォニー活動を開始。

1932(昭和7)年4月「名古屋交響楽団」と改称。

9月名古屋交響楽団、藤原歌劇団『ラ・ボエーム』に出演(名古屋市公会堂)。

1938(昭和13)年12月東京に本拠を移し、正式に「中央交響楽団」と改称。

1952(昭和27)年12月財団法人「東京フィルハーモニー交響楽団」が認可される。

さらにご興味のある方は、2011年に創立100年を迎えた東京フィルハーモニー交響楽団公式サイトおよび関連記事をご覧ください。 <http://www.tpo.or.jp/about/>

参考：電影会名簿(昭和58年版)

## 3) 名古屋工業大学：“名古屋工業大学憲章”基本使命、<http://www.nitech.ac.jp/intro/rinen.html> (2014) 基本使命(平成24年1月1日制定)

名古屋工業大学は、日本の産業中心地を興し育てることを目的とした中部地域初の官立高等教育機関として設立されたことを尊び、常に新たな産業と文化の揺籃として、革新的な学術・技術を創造し、有為な人材を育成し、これからの社会の平和と幸福に貢献することをその基本使命とする。

### 3 a) 建学の精神 <http://www.nitech.ac.jp/intro/president/2346.html> (2015) 抜粋

電気電子工学科教授から平成26年に学長に就任された鶴飼裕之先生(F52)は、平成27年度入学式式辞(平成27年4月)において、本学の建学の精神を次のように述べられました。

『創立 110 年という歴史ある名工大の根底を流れる建学の精神についてお話しします。名工大創立にあたって、初代学長である清水勤二先生は、教育と研究を両輪とする工業大学として、産業界の活きた問題を掘り起こし、それを活きた研究とすることで学術の根を深くおろすとともに、新たな製品を生み出す研究成果を創出していく。さらに、研究を教育に活かすことで優れた工学人材を養成することが、名古屋工業大学の使命であると、建学の精神を述べておられます。この実学を重視した名工大の学風が、今日まで 7 万人を超える優れた人材を世に送り出し、数多くの卓越した研究成果を築いてきました。』

- 4) 「撓みなく」は「たゆみなく」と歌われている。

「撓む」は「たわむ」と読み、(本来真っすぐな) 棒・枝などの一方に力が加えられてそり曲がった状態になる。=しなう。

「たゆむ」は「弛む」と書き、(形状が本来定まっていながら) 外力により一定の形状を保っていた糸などが、外力の喪失に伴って、保っていた形状を失うこと。=ゆるむ。心がゆるむ、油断するの意。

(岩波国語辞典第 3 版) (1980)、他

- 5) 伊吹山は歌枕。3 番の歌詞が恋の歌であるとは、廣瀬光晃先輩 (E 2 2) による。

小倉百人一首 5 1 番の引き歌である。

かくとだにえやは伊吹のさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを (後拾遺・藤原実方)

宮廷の花形・藤原実方が清少納言に贈ったとされる上の歌は、小倉百人一首にも収録され、特に有名である。

(意訳) 「こんなにお慕いしています」とだけでも、あなたに申し上げたいのですが、とても言えません。伊吹山のさしも草ではありませんが、私の中で燃えている恋の火がこれほどまでだとは、あなたはご存じないのでしょうか。

伊吹 (山) : 「いぶき」は「息吹」、神の「息」とも解せれる。伊吹山は薬草が豊富で、古来もぐさの名産地とされてきた。「さしも草 (=もぐさ)」「燃ゆる」「思ひ (=火)」は縁語関係にあり、伊吹 (山) とともによく和歌に詠まれた。

あぢきなや伊吹の山のさしもくさおのが思ひに身をこがしつつ (古今六帖)

けふもまたかくや伊吹のさしも草さらばわれのみ燃えやわたらむ (和泉式部集)

等、多数ある。

若い電影会会員の皆さんは、

杉田圭 (原作) : “超訳百人一首うた恋。” 第 8 話、テレビ東京 (2012)

公式ホームページ <http://www.mediafactory.co.jp/utakoi3/> (2012)

もご存じなのでしょうね。

- 6) 名古屋工業会第 4 2 回通常総会 (平成 2 0 年 5 月 2 4 日、於中日パレス) での特別講演

西川尚武先輩 (W 3 7) : 特別講演 “マンチェスターの栄光と没落そして再生”

に於ける学生時代の思い出話から「鶴舞公園を通るとベンチにアベックがなかよくすわっているのを横目に、『勉強しなきゃ』と、通り過ぎた。」

西川先輩はブログにて、昭和 3 3 年の入学式での清水勤二学長の

「優秀な技術者であるとともに、立派な人格者たれ」

との訓話を引用されています。

<http://www.eva.hi-ho.ne.jp/nishikawasan/>

- 7) ここの「行く」は、「ゆく」と発音したい。

- 8) 昭和 5 0 年代に浩養園で開催された電影会総会における電影会歌の思い出

電気工学科坂田弘教授（E18）による歌唱指導：「若い人で知らない人もいるようだから、一節ずつ、口移して（笑）お教えしましょう」と、前置きがあった。「又を肩幅に開き（笑）、左手は腰に、右手はこぶし」熊崎憲次先輩の前奏：「アインス、ツヴァーイ、ドラーイ」が熊崎憲次先輩（E23）の前奏であった。高朗清爽である。こぶしを大きく振って歌った。

## あとがき<試訳・電影会歌>

廣瀬光利（E50）

電影会役員会の席で、電影会歌は『昔はどう歌われていたのだろうか』と問いかけられたのは、平成24年のことでした。あいにく私は昭和46年入学の若い世代ですから、往時の電影児がどのように歌っていたかは定かではありません。

しかし、名工大で開発された話題のボーカロイド（歌声合成システム）Sinsyがこの歌を歌って、YouTubeにアップするという計画の話でしたので、興味を持って記憶をたどってみました。

私自身は在学中には歌ったかどうか記憶はおぼろげです。新歓コンパでは先輩たちが歌っていた、あるいは歌って聞かせてくれたように思います。他にもたくさん、楽しい歌がありました。卒業後にときどき出席していた電影会総会では、親睦会の終わりには決まって電影会歌を歌っていましたから、『昔は・・・』の問いには、その場にいらっやった大先輩の様子を思い出します。

意味不詳のまま歌っていた電影会歌の歌詞が、卒業後ずっと気にかかっていたので、この機会に少し調べて、現代語の意識を試みました。その過程で、清水勤二先生が名づけられた『電影会』の名称と、作曲者早川弥左衛門先生の功績について、興味深い発見をいたしました。そして何よりも、85年前の歌とは思えぬ色鮮やかな大学生活を内包している電影会歌に感動いたしました。

YouTubeのSinsyの歌声で電影会歌を聞きながら、学生時代に思いを馳せてくださればうれしく思います。

[www.youtube.com/watch?v=gmeuPawuv7Y](http://www.youtube.com/watch?v=gmeuPawuv7Y)

若い電影会会員の方々にとっても、私のように意味不詳で歌っていた方にとっても、この記事が歌唱の一助となり、毎年5月の電影会総会で電影会歌と一緒に声高らかに歌えれば最高です。

## 謝辞

ご指導下さった名古屋工業大学大学院教授山本いずみ先生、この記事が『でんえい会誌』と、ホームページに掲載する機会を与えてくださった電影会役員・幹事の皆様に感謝申し上げます。

電影会歌歌詞意識・註釈：廣瀬光利（E50, 株式会社廣瀬技術研究所）

名工大メールアドレス：m.hirose.995@nitech.jp

## 改訂履歴

改訂1. 「3a）建学の精神」を加筆しました。（2015年6月）